

キャンパス便り

佐久間貞重教授ご退官

農学部教授 佐久間貞重先生は本年3月31日をもって定年退職されました。

先生は昭和35年に東京大学農学部獣医学科をご卒業後、田辺製薬(株)戸田研究所(18年)、日本アップジョン(株)高崎総合研究所(6.5年)、アップジョンファーマシューティカルズリミテッド高崎総合研究所・筑波総合研究所(5.5年)に勤務されたのち、平成2年9月に本学獣医病理学講座の教授として赴任されました。以来、ご退職されるまで教育、研究、学会活動ならびに社会活動に情熱を注いでこられました。

研究面では各種病態モデル病変の作出と病理発生について精力的にご研究され、その一つ「豚丹毒菌感染症の実験病理学的研究」により農学博士の学位を取得されました(昭和49

年、東京大学)。また、毒性病理学の創始期から獣医学徒の先駆者として活躍され、多数の新薬の安全性評価と毒性病理学に関するご研究を続けてこられました。大学においては、それまで企業で培われた経験を生かされ、また、卓越した統括力を発揮されて、薬物、ウイルス、腫瘍細胞を用いた種々の病態モデルならびに遺伝的疾患モデルなどを作出し、それらの病理発生に関する優れた研究成果をあげられ、獣医病理学ならびに毒性病理学の発展に多大な業績を残してこられました。加えて先生は、教育面でも深い学識と広い識見を持って学生に接され、多くの有為な人材を社会に送り出されました。

このような研究者、教育者としてのご業績



写真：最終講義の様相
(平成11年3月13日)

の他に、日本毒性病理学会評議員・理事、日本獣医学会評議員、日本獣医病理学会理事、日本獣医病理学専門家協会理事、日本比較薬理学・毒性学会評議員、日本トキシコロジー学会教育委員会委員・常任審査員、日本実験動物学会評議員などの要職にあり、平成7年1月には第11回日本毒性病理学会会長として本学で学会を主宰されるなど各種学会の発展に大きく貢献されました。学内にあっては農学部将来検討委員会、広報委員、家畜病院運営委員、大学院小委員、学科主任、補導委員を歴任され、本学の充実と発展に寄与されました。また、学友会の常任幹事(広報担当)を長

年にわたって勤められました。

去る3月13日、農学部大講義室で「人生いろいろ—1病理学徒の41年」という題で最終講義が行われました。学生時代から今日までの各時代のご研究内容、人の出会いなどについて熱弁され、また先生の大学観を拝聴しました。そのあと引き続き開催された退官記念祝賀会には全国各地から多数の方々のご出席を頂き、盛会裡に執り行うことができました。これもひとえに先生のお人柄に帰するところと存じます。今後の先生のご多幸と更なるご活躍をお祈りいたします。

(獣医病理学講座 小谷猛夫)

大阪府立大学農学部附属家畜病院におけるX線CT撮影装置の使用状況

獣医学友会報(第28号)に馬場病院長が報告したように、昨年9月からX線CT撮影装置が稼動して以来、各種の疾病の確定診断の一助として使用しています。昨年の9月は試験期間で、11月頃までは本装置への慣れや画像の判読などに不安もありましたが、学友会会員の諸先生方の協力もあって、症例数の増加とともに現在では使用手順、解析法の多様化および適切な解析法などに慣れ、従来のX線診断と同レベルでの使用が可能になっている状況です。と言うのも、本装置では費用および不動化のための鎮静などが必要ですが、診断に際して動物の鎮静は、比較的一般状態の良好な症例ではメドミジン・塩酸ケタミンによる鎮静・鎮痛麻酔法を使用し、状態の悪いと判断した症例では吸入麻酔を行っています。利用頻度は導入後から本年4月までで約130症例程度となります。その対象部位では頭部(脳疾患や鼻腔疾患)が最も多く、腹部、胸部および

脊椎の疾患にも利用しています。頭部では水頭症、脳腫瘍、鼻腔内腫瘍の暫定的確定診断を可能にし、胸腹部では占有性病変の原発部位や他臓器との関連を明瞭化し、より明確な診断および治療方針の確立に役立つだけでなく、クライアントへの説明にも大いに役立っています。

X線CT診断は従来のX線診断と同様に形態を評価する画像診断だけでなく、本装置により対象臓器の機能をも評価したいと考えています。そのため、内科および外科診療科では水頭症、脳損傷、脳腫瘍および腎疾患などの実験モデルによるX線CT解析についての研究を推進しているだけでなく、臨床症例のデータを集積する努力を続けております。今後とも上記症例に留まらず、多くの症例のご紹介およびご意見・ご提案をお願いいたします。

(獣医外科学講座 大橋文人)